

神の栄光を求める

1. 神の栄光を求める

「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい。」(第一コリント 10 : 31)

① 自分の栄光を求めるのは、悪魔から始まった最大の罪

「今度は悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華を見せて、 9 言った。「もしひれ伏して私を拜むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。」(マタイ 4 : 8~9)

② 最も高い階級のケルビムでさえ、常に神の栄光を称えている

「この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その回りも内側も目で満ちていた。彼らは、昼も夜も絶え間なく叫び続けた。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔いまし、今いまし、後に来られる方。」(黙示録 4 : 8)

・ 悪魔は元々、このケルビムの一人だった

③ パウロは自分の働きが神の恵みであることを強調した

「ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。」(I コリント 15 : 10)

④ 弟子たちは、自分たちの権威ではなく、イエスの御名に注目した

「さて、七十二人が喜んで帰って来て言った。「主よ。あなたの御名を用いると、悪霊どもでさえ私たちに服従します。」(ルカ 10 : 20)

2. 神を礼拝する

① 礼拝とは何か

「二十四人の長老たちは、御座に着いておられる方の前にひれ伏して、世々限りなく生きておられる方を礼拝した。また、自分たちの冠を御座の前に投げ出して言った。 11 「主よ、私たちの神よ。 あなたこそ 栄光と誉れと力を受けるにふさわしい方。 あなたが万物を創造されました。 みこころのゆえに、それらは存在し、 また創造されたのです。」(黙示録 4 : 11~12)

- ・ 神の前に自分を無にして「ひれ伏す」こと
- ・ そのような心の態度に基づき、歌や言葉を通して神の栄光をたたえること

② 礼拝者であることは信者のアイデンティティー

「しかし、まことの礼拝者たちが、御霊と真理によって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はそのような人たちを、ご自分を礼拝する者として求めておられるのです。」

(ヨハネ 4 : 23)

- ・ 人間は神を礼拝する者として造られた。
- ・ 歴史を通じて神の民は礼拝をしてきた。
- ・ 天の全軍は常に神を礼拝している。

③ 賛美は礼拝における重要な要素

「あなたは聖であられ、イスラエルの賛美を住まいとしておられます」(詩篇 22 : 3 第三版)

- ・ イスラエルも教会も歴史的に賛美を大切にしてきた。人間は賛美者として造られた。

「ほめ歌を歌え。神にほめ歌を歌え。ほめ歌を歌え。私たちの王にほめ歌を歌え。7 まことに神は全地の王。ことばの限りほめ歌を歌え。」(詩編 47 : 6~7)

- ・ レビ人は、朝と夕に賛美をしていた。

「最果てに住む者も、あなたの数々のしるしを恐れます。あなたは朝と夕の始まる所が、高らかに歌うようにされます。」(詩篇 65 : 8)

④ 礼拝のために定期的に集まる

「ある人たちの習慣に倣って自分たちの集まりをやめたりせず、むしろ励まし合ひましょう。その日が近づいていることが分かっているのですから、ますます励もうではありませんか。」(ヘブル 10 : 25)

- ・ 要点は、礼拝のために定期的に集まること

＊初代教会の時代から、日曜日に集まる習慣が確立してきた。

＊メシアニック・ジューは土曜日の夕方、イスラム圏は金曜日が多い

- ・ 適切な頻度は週に一度以上

「8 安息日を覚えて、これを聖なるものとせよ。9 六日間働いて、あなたのすべての仕事をせよ。・ ・ 11 それは主が六日間で、天と地と海、またそれらの中のすべてのもの

のを造り、七日目に休んだからである。・・」(出エジプト 20 : 8~11)

*クリスチャンには安息日は関係ないが、七日間の天地創造は不変の真理

*自然界の生物には、7のサイクルが組み込まれている。(動物の妊娠期間、細胞の入れ替わり)

- ・ 週に一度、主を第一にするなら必要なものは備えられる

「主はモーセに言われた。『見よ、わたしはあなたがたのために天からパンを降らせる。民は外に出て行って、毎日、その日の分を集めなければならない。これは、彼らがわたしのおしえに従って歩むかどうかを試みるためである。5 六日目に彼らが持ち帰って調えるものは、日ごとに集める分の二倍である。』」(出エジプト 16 : 4~5)

3. 献金を捧げる

- ① 本質的には、全ての財産は主のものである

「銀はわたしのもの。金もわたしのもの。——万軍の主のことば——」(ハガイ 2 : 8)

- ・ お金は神から委ねられているもの
- ・ 適切に管理し、御心に適う用い方をする事が期待される

- ② 捧げる機会を心から求める

「私は証しします。彼らは自ら進んで、力に応じて、また力以上に献げ、4 聖徒たちを支える奉仕の恵みにあずかりたいと、大変な熱意をもって私たちに懇願しました。」(第二コリント 8 : 3~4)

- ・ マケドニアの信者たちは、進んで捧げる機会を求め、大胆に献金をした

- ③ 豊かに蒔く者は豊かに刈り取る

「私が伝えたいことは、こうです。わずかだけ蒔く者はわずかだけ刈り入れ、豊かに蒔く者は豊かに刈り入れます。7 一人ひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は、喜んで与える人を愛してくださるのです。」(第二コリント 9 : 6~7)

- ④ 貧しくても豊かに捧げることができる

「イエスは目を上げて、金持ちたちが献金箱に献金を投げ入れているのを見ておられた。2そして、ある貧しいやもめが、そこにレプタ銅貨を二枚投げ入れるのを見て、3 こう言われた。『まことに、あなたがたに言います。この貧しいやもめは、だれよりも多くを投

げ入れました。 4 あの人たちはみな、あり余る中から献金として投げ入れたのに、この人は乏しい中から、持っていた生きる手立てのすべてを投げ入れたのですから』(ルカ 21 : 1~4)

- ・ 神は額の大きさではなく、パーセンテージで見ている。

⑤ 献金を隠れて行うことにより、天に宝を積むことになる。

「あなたが施しをするときは、右の手がしていることを左の手に知られないようにしなさい。 4 あなたの施しが、隠れたところにあるようにするためです。そうすれば、隠れたところで見えておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。」(マタイ 6 : 3~4)

「自分のために、地上に宝を蓄えるのはやめなさい。・・自分のために、天に宝を蓄えなさい。」(マタイ 6 : 19~20)

⑥ 収穫の初物を神に捧げることにより、残りが祝福される

「9 それぞれの収穫物の初物をささげ 豊かに持っている中からささげて主を敬え。 10 そうすれば、主はあなたの倉に穀物を満たし 搾り場に新しい酒を溢れさせてくださる。」(箴言 3 : 9~10)

⑦ 十分の一の原則

- ・ 神がご自身を試すようにと語った唯一のことば

「十分の一をことごとく、宝物倉に携えて来て、わたしの家の食物とせよ。こうしてわたしを試してみよ。——万軍の主は言われる——わたしがあなたがたのために天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうか。」(マラキ 3 : 10)

*実際に十分の一を信仰的に捧げる人は、経済的に守られるケースが多い

- ・ 神の備えに対して十分の一を捧げる習慣は律法以前のアブラハムの時代から

「18また、サレムの王メルキゼデクは、・・アブラムを祝福して言った。『アブラムに祝福あれ。・・いと高き神に誉れあれ。 あなたの敵をあなたの手に渡された方に。』アブラムはすべての物の十分の一を彼に与えた。」(創世記 14 : 18~20)

*孫のヤコブも十分の一を実行している(創世記 28 : 20~21)

*献金の基準の適切なラインとして、聖書は十分の一を示唆している。

*七日間の天地創造と同様、自然界の法則のように機能している可能性がある

- ・ 新しい契約以降は、十分の一についての明白な言及はない

*十分の一に否定的な人は、それを少なく捧げる理由にすべきではない

*肯定的な人も、それ以上捧げない理由にすべきではない。